十七歳の不在

第一章

七月十八日

「和歌山広美」

「ワカヤマヒロミ」

「休みか？」

　何か聞いてるか？という目で、教壇に立つ、担任の大久保凌平が、広美と仲の良い、広美のすぐ前の席に座る、山田選子を見つめる。

「分かりません」と、選子は首を横にふる。

それと同時に、教室の後ろのドアが開き、広美が肩で息をしながら、中庭に近い窓際の、一番後ろの自分の席に着こうとする。

「大久保先生、おはようございます」

　挨拶の声は滑らかに大久保のもとへ届いたが、額の汗は隠しきれていない。

「おはよう、和歌山」

「ギリギリセーフ、でしたよね、私」

「ギリギリセーフか、アウトかは、オマエさんが決めることじゃないんだが」

　と大久保が返事をすると、教室全体が、笑い声で満たされる。

　これ以上は叱れないなという表情で、大久保が続ける。

「和歌山、合唱部だったな。朝練は？」

「ありました」

「ちゃんと、制服に着替えたってことだな？」

「はい」

「朝練に出ずに、制服でそのまま来たってことはないんだな？」

「もちろんです」

　大久保の口調はあからさまに疑う様子だったが、広美は冷静に答えた。

「山田、お前も合唱部だったな？」

「はい」

　選子は座ったまま返事をする。

「お前も、朝練の後に制服に着替えたってことだな？」

「はい、そうです」

「だったら、和歌山のことを聞いたとき、朝練には来ていたぐらい、言ってやってもいいんじゃないか」

「はい、すみません」

　反射的に、選子の口から謝罪の言葉が出てくる。

「いや、謝れってことではなくて。怒ってるわけじゃないけどさ」

　大久保のこの言葉を聞いて、選子も広美も、ほっとした表情を見せる。

「二人とも、ちゃんと制服に着替えたのは、エラいじゃないか」

　二人のほっとした表情を見て、大久保も応じる。

「じゃあ、今日来てないのは、男子は中澤登、女子は天野レイ、だな？」

全体を見まわしつつ、大久保が言葉を続ける。

すると、今度は、廊下側の一番前の机、つまりは天野レイの机にクラスの大半の注目が集まったが、大久保の眉間のシワは怒りを隠し切れていない。

「選挙管理委員の川居から、連絡があります」

先ほどまでよりやや落ち着いた口調で、大久保が川居一夫の名を呼ぶ。

野球部、丸坊主、キャッチャー体型。学ラン。あだ名は、こむすび山。

川居は席を離れ、教卓の大久保の隣に立った。

「選管の川居です。既に何度かお知らせしていますが、二学期に模擬選挙があります。夏休み中に、お配りしているプリントに目を通しておいてください」

「それから、休み中、くれぐれも事故等に気をつけて過ごすように。じゃあ、解散」

都立望月高校の校門を出ながら、

「立川、台風来るみたいだよ」

と、広美が言うと、

「立川さあ、台風の本番、今夜から明日の明け方じゃない？」

と、選子が空に手をかざす。

　まだ日差しは強いが、空気は湿り気を帯びており、街路樹として植えられているサルスベリの色も濃い。蝉の鳴き声も聞こえるが、ここ数年、都内の天候は変わりやすさを増し、油断をしていると、台風に巻き込まれかねない。

「アレっしょ、さっきの、レイん家に寄れって？」

　遥か彼方の暗い空に視線を投げつつ、口調だけは笑いながら、広美が選子に言う。

「休み中の宿題を追加するなんてさあ、本当に大久保らしいよね」

自分で手に持っている、大久保から依頼された天野レイへの預かりものを、中身も確認しないまま、選子が答える。

「追加の分はさ、やってきたら、今日は半日だし、今日の休みは出席ってことにするんじゃないかな」

「そうなの？そんな風に考えられるんだとしたら、やっぱり、広美って優しいよね」

「はあ？なんでそうなるの？そんな風に考えられるんだとしたら、やっぱり、大久保先生って優しいよね、じゃないのかよ？」

「あ、そうだね。ごめんね。大久保先生も広美も優しい人です」

バス停を二つ分ほど歩いたところで、二人の額に汗が滲む。

　この季節にしては違和感のある黒い長袖の、腰まわりがビニール素材で円形の羽根と分かるパーツのついた冷却着を着た男性と、すれ違う。

「あれ、本当のところはどうなの、涼しいの？」

　フェイスタオルで額の汗を拭きながら、広美が言う。

「一回ぐらいは着てみたい。結局は暑さが勝ってそうな気はするけど」

　カバンから取り出した冷却シートを、広美にも勧めつつ、選子も答える。

天野レイの住むマンションは十階建てだ。一階の共用部分に、いつもはガードマンか管理人らしき人が座っているが、広美たちが到着したときには、誰もいなかった。

　エントランスのインターホンを押すと、

「はーい」

と、間延びした女性の声で返答があった。

「和歌山広美と山田選子です」

「あら、いらっしゃい。暑い中、悪いわね」

　エントランスの電動ドアが開く音がする。エレベーターフロアは冷房が効いており、どちらからともなく、二人に笑みがこぼれる。エレベーターで三階まで上がり、三棟並ぶうちの一番奥がレイの部屋だった。

「いらっしゃーい」

　ドアが開くと、天野レイの母の澄子が出迎える。柔らかくウェーブのかかったセミロングの髪色は、重みを感じさせないブラウン。十七歳の子供がいるとは思えない童顔だが、くっきりとした二重と猫のような目が、キュートな印象を与えている。

　今の言葉でいうところの、ファストファッションの上下は、手を抜けばたちまち貧相に見えてしまうところだが、ポロシャツとチノパンはアイロンが行き届いており、真夏を感じさせない冷涼感と清潔感がある。

「夕方まで、涼んでいっていいから」

「お言葉に甘えて、少しだけお邪魔します」

　澄子は、二人をリビングのテーブルに座るよう促す。

「レイはすぐ来ると思うから。あと、今日はパパもいるけど。なんとかリモートだから」

「リモートワークですか？」

　椅子に座りながら、広美が返答する。

「アハハ、それよそれ」

「お邪魔します。これだけ、レイちゃんに渡して、すぐに退散します」

　担任の大久保からの預かりものを澄子に見せながら、選子が言う。

「選子ちゃん、わざわざありがとうね。あの子が休みたいなんて、珍しいんだよね」

　後半は、独り言のように、澄子は視線を泳がせながらそう言った。

「和歌山、山田、心配かけてゴメンね」

　二階へと続く階段の上から、澄子とは似ていない、しかしよく通る女性の声が聞こえた。

　解けば肩甲骨の辺りまでありそうな、烏の濡れ羽色の髪を、幾つかの髪留めを駆使して頭頂部でまとめている。もともとの糸のような釣り目や、筋の通った鼻、意思を感じる一文字に閉じた口などが、全体として見ると、線のパーツの多い美しさを湛えている。

　外出しなかったのだろう、無地のTシャツにピンク色のジャージを穿いている。

　そして、胸元には「プログラミング入門」と書かれた本を抱えている。

「アンタ、情報処理部に入ったって本当だったんだね。水泳部とか陸上部と、兼ねてるんだっけ？」

「和歌山、私に、そんなにややこしい裏取引、出来ると思う？」

「いやいや、そうだよね。結局、潔く情報処理部をね、選べるのこそ、レイだよ」

「二人は、一緒に合唱部あたりかな。和歌山、ボーカリスト志望なんだな？」

「ボ」の字を強調しながら、レイが広美に尋ねる。

「広美ちゃん、アイドル歌手になるのー？そういうのなんて言うんだろ、えーっと、野心家？野望？があるんだねー」

「お母さん、夢っていう、も少しやわらかい表現もあります」

「やだ、そうよね、夢よね。応援するからね」

　もう、叶えられたのだという体で、澄子は広美に励ましの言葉を伝えた。

「広美ちゃんの、そんな夢、全然気づけなかった。ごめんね」

　選子は、四月の終わり頃、広美に誘われて、合唱部に入部した。学校の方針で、全員が部活動に入ることになっていた。そもそも、選子は歌うことが嫌いでもなければ、苦手でもなかった。更に言うなら、選子の中では数少ない得意分野だった。もちろん、広美はそれを知った上での勧誘だった。しかし、選子は純粋に広美から誘われたということが嬉しく、それで入部を決めたのだった。

「みんながいろいろ言うから、誰のどの発言から否定すればいいのか、もう分かんなくなってるし。でも、夢ってことで認める」

　そう言う広美の表情に困惑の様子はなく、ただ笑っていた。

「賑やかで、楽しそうだね」

　一人の男性が、リビングに姿を現した。

　出勤しなくても、天野次郎の髪は梳かして六対四で分けられている。次に特徴として映るのは、銀縁の眼鏡で、真面目だが隙のなさのアピールも同時に感じられる。中肉中背、スラックスに半袖のYシャツ姿というだけで、ほぼ平日のサラリーマンと変わりないが、七分丈のインナーシャツが、冷房の弱さ対策をする今時の若者であることを静かに強調していた。

「レイのお父さん、お邪魔しています。お席を空けますね」

　如才ない立ち振る舞いで、広美がすぐに席を立とうとする。

「広美ちゃん、選子ちゃん、いらっしゃい。オレはさ、小腹空いたから、夜はその辺で食べて済ませるから」

「レイのお父さん、お久しぶりです。私たちもすぐに帰りますので」

　広美に倣うように、選子も席を立つ。

「澄子、あと、会社の人と連絡を取ったりもするからさ」

「わかった。じゃあ、次郎さんがウチでも軽く食べられるように、何かは用意しておくからね」

「ありがとう、みんな、ごゆっくり」

　気づけば、次郎は玄関先まで移動しており、気づけば、玄関のドアは閉められていた。

「次郎さん、お仕事、お忙しいんですね」

　決まりきったようなフレーズでも、広美の言葉は心がこもっているように聞こえた。

「さあ、どうかしらねー」

　かすかに首をかしげるような様子で、澄子が言う。

「えっ？」

　澄子の一番近くに立っていた選子が、思わず驚く。

「やだ、選子ちゃん。冗談のつもりだったんだけどー」

　今度は大きな声のボリュームで、澄子が応じる。

「なんだ、真に受けちゃってすみません」

　自分の体の一部分を痛めたかのような口調で、選子が言う。

「そろそろ遅い時間だし、私たちも帰ります」

　玄関で自分の靴を確認しながら、広美が言う。

「夜はお寿司でもとろうかって、さっき、レイと話してたんだけど」

「それじゃ、それはまた今度」

　今度がいつなのかは、誰も言及しない。

「わかった。じゃあ、和歌山、山田、下のエントランスまで見送るから」

　サンダル履きのレイが、広美と選子の遠慮を上書きするかのように、エレベーターまで先に進み、かごを呼ぶボタンを素早く押す。

　エレベーターが到着する音が鳴り、三人がかごへ乗り込むとすぐ、レイが言葉を発した。

「アタシ、夏休み中に、オフ会に参加するから」

「オフ会？」

「親には内緒？」

　全く同じタイミングで別々の質問を、二人はレイに投げかける。

　エレベーターのドアが開き、三人はそのまま、外まで出てしまう。

　十六時をまわっても、なお暑さは空気を忌々しく占領したままだった。

「心配しないで、ちゃんと親にも言うつもりだから」

　レイからの返事はその一言のみだった。

「何か協力することがあったら、すぐに言ってよ」

　こういうときの、広美の言葉は、的確にレイの支えになる。

「青春じゃん。楽しそう」

　真面目な表情で、選子もレイに続けて言う。

「まだ、何がどうなるか全然決まってないけど、二人とも、ありがとう」

「レイはもう部屋へ戻って。私たちも帰りづらいからさ」

「わかった。じゃあまた」

　レイは再び、自分の部屋へと戻って行った。

　広美と選子も、付近から乗れるバスで帰る。ここ数年、日本がより暑い夏を経験してから、二人とも以前よりバスを利用するようになった。空いている席があれば一旦座ったり、止むを得ず立つ場合には揺れに備えて二点で全身を支えたり、などの暗黙のルールに慣れつつあった。